

# 関金裁判ニュース

2009年11月23日発行

第56号

金山「従軍慰安婦」  
女子勤労挺身隊  
公式謝罪等請求事件

戦後責任を問う  
関金裁判を支援する会

関金裁判とは、一九九二年一二月、韓国釜山市などの元日本軍「慰安婦」と元女子勤労挺身隊の十人が、山口地裁下関支部に、日本國の公式謝罪と賠償を求めて提起した裁判である。一九八四年四月、「慰安婦」原告に一部勝訴判決がでた。しかし、広島高裁で、二〇〇一年三月、「慰安婦」原告逆転敗訴、挺身隊原告の請求は全面棄却。二〇〇三年三月、最高裁で上告棄却。

## 鳩山政権の下で

### 「慰安婦問題の立法解決を！」

花房俊雄

一 待ちに待つた政権交代  
八月三〇日の総選挙で戦後初めて本格的な政  
権交代が実現し、九月一六日に鳩山連立政権  
が発足した。十月九日最初の訪問国・韓国で  
鳩山首相は「韓国と日本との間にはいろいろ  
な懸案があるが、新政権は歴史をまっすぐ正  
しく見つめる勇気を持つた政権である。ただし  
し、何でも解決できるわけではなく、時間的  
な猶予が必要である」と述べた。

鳩山政権発足一ヶ月の経過の中で、自民党  
の「二国間条約で決着済み」として過去の加  
害の歴史を直視することを避け続けてきた從  
来の歴史認識との違いを鮮やかに示しながら、  
その実現が簡単でない国内政治の現状認識を  
示した。

思い起せば、「慰安婦」被害者への賠償法  
の成立を促した画期的な下関判決直後の九八  
年五月一四日に開かれた戦争被害者の真相究  
明法の成立を目指す院内集会で、私の判決報  
告に応えて鳩山由紀夫議員は「山口地裁下関  
支部で出された判決は、国会の責任をハッキ  
リさせたというべきではないでしょうか。真  
相究明のためにも国会で全力を挙げなければ  
ならない…」と述べられた。あの日から数  
々なる長い年月を経てついに戦後補償への熱

ボーラーを訪れた鳩山首相はアジア政策講演で、  
「日本と他のアジア・太平洋国家の間に友愛  
の連帯を作ることができないかをずっとと考え  
てきた」、「日本が、多くの国、特にさまざま  
なアジアの人たちに多大な損害と苦痛を  
与えて六十年以上が過ぎた今も、眞の和解が  
達成されたとは思えないからだ」と話した。

ついで十一月十五日、エイペックでシンガ  
ポールを訪れた鳩山首相はアジア政策講演で、  
「日本と他のアジア・太平洋国家の間に友愛  
の連帯を作ることができないかをずっとと考え  
てきた」、「日本が、多くの国、特にさまざま  
なアジアの人たちに多大な損害と苦痛を  
与えて六十年以上が過ぎた今も、眞の和解が  
達成されたとは思えないからだ」と話した。

小泉首相以後の自民党政権下で切り捨てら  
れない…」と述べられた。

れてきた弱者の生活と破壊してきた人と人との絆を再生する国内「友愛」政治を経て、アジアの人々との絆の再生に取り組むのが鳩山政権の狙いであろう。

また、戦後補償など戦後のアジア外交の大転換を伴う政策を担うと期待されている国家戦略局がいまだ本格的に始動せず、政権内で戦後補償を担う窓口が設置されていない。議員立法は原則禁止して閣法（内閣が提出する法案）で、との小沢民主党幹事長の方針で、從来民主党内で『慰安婦問題解決促進法案』を推し進めてきた議員たちも戸惑いをかくせないようだ。

このような政権交代に伴う試行錯誤を見据えながら、私たち市民の側からの立法運動への取組みが必要とされる。

### 三今後の取組み

失業者の増大、税収のかつてない落ち込み、デフレによる経済の更なる縮小など、年末に向かって厳しい経済状況の中で鳩山政権は生活再建に向けて苦闘の船出をしている。外国人戦争被害者の戦後補償が課題に上るのは早くても来年の通常国会で予算審議が終了する四月以降であろう。

そのような政治状況を冷静に見つめながら、政権内で「慰安婦」問題をはじめとする戦後補償の立法解決を優先課題に押し上げていくために私たちが取り組むべき課題を考えたい。

#### ①議員への働きかけ

連立政権を支えている議員、とりわけその中心である民主党議員に「慰安婦」問題などの歴史認識と解決の緊急性を伝えていくことがまず第一である。民主党内には「慰安婦」問題など戦後補償の立法解決に熱心な議員と強く反対する議員が共に少数いて、多くの議員は無関心、とりわけ大量に誕生した新人議員の多くは賛成・反対以前に知らないのが実情である。国会で、あるいは地方で議員を訪問し、さらにあらゆる機会を活用して多くの議員に「慰安婦」問題を伝えていかねばならない。今後地元議員への訪問、あるいは上京して議員へのロビー活動に取り組んでいきたい。

こうした活動を通して「慰安婦」問題の解決に熱心に取り組む議員への国会内外からの圧力を弱め、孤立化を防がねばならない。

②世論をいかに盛り上げるか  
「慰安婦」被害者が名乗り出、日本軍の関与が明らかになつた十八年前の盛り上がつた世論に比べて「二」数年、マスコミが「慰安婦」問題を取り上げることはあたかもタブーであるかの」と、狭小なナショナリズムがひろがつてきただ。政権交代によってこのような世論が劇的に変化するわけではない。鳩山首相の「東アジア共同体」構想は、国民のアジア諸国に対する内向きの意識を外に向か、アジアの人々と共に生きていこうとする提案である。いまだいまいなこの構想を歴史認識の明確化と戦後補償の実現を通して日本の政府と国民が誇りを持って訴えうるものにしていかねばならない。

閉じられてきた国民の意識を再度開くために、大きな取組みが必要である。国内で「慰安婦」問題の解決を国に訴える市議会決議を次々にあげている日本軍「慰安婦」問題関西ネットワークが呼びかけた「慰安婦」問題立法解決緊急120万署名に私たちも参加したい。同封する署名用紙を是非活用してください。周りの人や団体に呼びかけてください。

さらには、同封するチラシにある十一月四日・インドネシアの被害者の証言を聞く集会、五日の映画「ナスマの家」の連続上映会とナスマの家で働く青年・村山一兵君の講演にぜひ参加ください。

このよう取組みを地方で積み重ねながら、来年の国会での予算審議が終わる四月下旬か五月上旬に、「慰安婦」問題の立法解決を促す

大きな集会と強力なロビー活動を国内外から  
から東京に集まって開こうとする取組みが話  
し合われています。ご注目ください。

関釜裁判の元「慰安婦」原告三人のうち、  
河順女さんと朴頭理さんはすでにお亡くなり  
になつた。李順徳さんは毎週ソウルの日本大  
使館前で行われる水曜デモに参加し続けてい  
る。せめて彼女が生きているうちに立法解決  
の報を届けたいと切に願う。

「慰安婦」問題の解決に比して女子勤労挺  
身隊の立法解決は一層困難である。日韓条約  
資料に強制連行被害者への未払い賃金や死者  
への補償は韓国政府がするとの内容が明らか  
になり、韓国政府の支援法で元女子勤労挺身  
隊員にも年間八十万ウォン以内の医療支援と、  
負傷した者への一時金の支給がなされている。

しかし異民族支配の植民地下で強制連行・  
強制労働をさせられた苦痛への明確な謝罪と  
賠償はなされていない。ましてや十三〜四歳  
の少女たちが味わった戦前・戦後の苦痛はよ  
り一層痛ましいものである。

不二越や三菱を相手取った企業闘争と並ん  
で立法解決への道も「慰安婦」問題の立法解  
決の中で切り開いて行きたい。

連続企画 12月4日 インドネシアの被害者を招いて

### 戦時性暴力にストップを：インドネシア「慰安婦」被害者の叫び

12月4日（金）18:30～20:30 場所 福岡聖パウロ教会（草香江聖公会）

証言者 スハルティさん（被害者80歳）

講演者 エカ・ヒンドラティさん（インドネシアのフリージャーナリスト）

主催：「慰安婦」問題を取り組む九州キリスト者の会

共催：「早よつくろう！」「慰安婦」問題解決法・ネットふくおか

消せない記憶 — つなぐ記憶

12月5日（土）

### ナヌムの家の元「慰安婦」ハルモニたち

ドキュメンタリー映画「ナヌムの家」・「ナヌムの家II」上映と

#### 村山一兵さん（ナヌムの家歴史館研究員）のお話

開催日時： 12月5日（土曜日）PM 1:30（開場1:00）～5:30

会場： 西南学院大学内 西南コミュニティセンターホール  
(地下鉄「西新」駅下車徒歩5分)

参加費： 無料（会場カンパあり）

主催： 全国同時企画・福岡実行委員会

共催： 西南学院宗教局

後援： 西南学院大学宗教部

早よつくろう！「慰安婦」問題解決法・ネットふくおか

## 計報

悲しいお知らせです。四月十二日に成ささんが、この夏に妻ヨさんのがお亡くなりになりました。

もどんなどらかたことかと思います。だからこそ、日本政府と不二越を相手とした裁判への思いは強かつたので、闘い半ばでの裁判に胸が痛みます。長男が訴訟を継承し、五月の原告団会議にも出席されたそうで、成ささんも嬉しいことでしょう。



成 さ さん（一九三〇年五月十五日生）

（不二越に強制動員、第一次不二越訴訟原告）

成さんは昨年十二月の本人尋問に出るつもりで準備していたのに体調不良で出席できず、四月に急逝されました。

成さんは昨年十二月の本人尋問に出るつもりで準備していたのに体調不良で出席できず、四月に急逝されました。

成さんは昨年十二月の本人尋問に出るつもりで準備していたのに体調不良で出席できず、四月に急逝されました。

成さんは昨年十二月の本人尋問に出るつもりで準備していたのに体調不良で出席できず、四月に急逝されました。



妻 ヨ さん（一九三〇年十一月十一日生）

（東京麻糸へ強制動員、関釜裁判原告）

妻さんは、一昨年より脳腫瘍で入院されていて、この一年近く意識不明の病状でした。企

業に対する裁判はされませんでした。「恨(ハ

ン)」を内に秘めて、芯の強い方でした。支援する会のメンバーが釜山へ行つたときに、朴

成さんのと一緒に彼女のマンションに泊めてもらっていました。

八人のうち四人は、彼女が「挺身隊」だったと知った夫が、「慰安婦」だと誤解し、彼女が隠していたとして蔑み、他の女性に産ませ、彼女に育てさせました。彼女も子供たち

お二人の「冥福をお祈りします。

（十頁より続く）  
か、分らないべつちや（裁判）等と、その「たたかい」の折々の言葉が生きた言葉としてそのままパネルの表示になっています。読みながら、宗神道さんのその深い感性に引き込まれていきます。パネルは沢山あつたのですがベースの広さに限りがあり全部展示できなかつたことは大変残念なことでした。しかししながら立ち止まる人は皆その言葉に惹かれて読み留まるのです。これはもう一度ゆつくり展示会を行う必要性を感じました。

また、「戦争展」でも、「ハートフルフェスティ」でも、DVD「私たちの公聴会」日本軍「慰安婦」中国人被害者・万愛花さんと、韓国人被害者・吉元玉（キル・ウォノク）さんの証言（三十二分）を流しました。「慰安婦」の方々の証言は何度聞いていてもその体験は凄まじく、お二人の証言は同じところで同じように聞く側に胸の痛みを起します。多くの人たちが聞く必要がある、とその度に思います。

政権が民主党に移り、世論を大きく変えていく大きなチャンスに出会つていて」とを感じます。

回復した私の身体に戻つてきた新しいエネルギーに力をもらいながら、「このチャンスを「慰安婦」問題に心を寄せる人たちとともに生き、燃料として燃やしていく」と思っています。

十月 不一越第一次訴訟 控訴審結審

不二越正門前座り込み闘争に参加して

花房恵美子

五月の原告団総会での、原告たちの固い決意：「（社長に会うまでは韓国に）帰らない！私たちを止めないでほしい！」を聞いていましてし、七月に訪韓したときも金丁（キム・

）さんたちから「片道切符で行く」と直接聞いていましたので、今回の結審のときは大変な闘いになることが予想できました。なんとか参加して皆さんと共にありたいと願い、十月四日から七日まで北陸入りしました。

今回の不二越闘争に関して、北陸連絡会で深刻な討論がなされたと聞いていました。原告の気持ちに寄り添うということはどういうことなのか、現場に来て考えさせられました。原告ハルモニたちの叫び、「私たちを止めないでほしい！」を日本側支援者としてどう受け止めるのが困難な判断だったと推測します。

きくなり、急速、柳下（ユ・ト）さんが意見陳述されることになりました。

引き締まる思いでした  
カメラマンのチエ・チ

今日は十月一～四日の秋夕(チュソク  
お盆)

と重なったために、結婚には柳下さんお

ナニ四日い東日本大震災の廃墟がせ  
トさん、チヨン・〇 さん、チエ

Hさん、キム・M

前に来日して、柳さんと合流し、不二越正門

前座込み闘争を開始しました。

原島から車で土井さん、塙さん、前田さんが駆けつけ、柳下さんが大喜びされました。

膠着状能

不二越正門前にバリケードが張られて、いたので、約一キロさきの駐車場から歩道デモをしながら正門前まできました。着いたとた

ん、ガンガン、バリバリとバリケードを蹴破る音がして、アツと言う間にバリケードが空破され、三十人以上の職員・警備員と対峙しました。道路の反対側には立派な背広を着た十人以上の集団がやたらビデオをとつていまし。良く見ると警察集団でした。

警備の人を殴つていたハルモニたちが門の隙間から構内に滑り込んで、もみ合つてゐるうちにチヨン・〇さんのが氣分が悪くなり、救急車を呼びました。

「二二までの戦闘力、二二までの思い!!!  
ハルモニたちの尊厳回復への強い意志に身が

## ドキュメント

**十月五日 不二越第二次訴訟控訴審結審**

柳下さんが意見陳述。発言後、傍聴席から大きな拍手が起きた。弁護士四人が交替でわかりやすい最終意見陳述をおこなう。裁判は一時間三十分。判決日は指定されず。

裁判後、記者会見と集会がおこなわれる。柳下さんは募集のいきさつから、帰国までの苦労を訴える。（後記）

**十月六日 富山空港で原告第二陣と合流。島田弁護士も激励の挨拶をした。**

不二越正門前は、バリケードが張られ、門にさえ近づくことができないようにしてあつたが、原告とともに、突破して門前での闘いが始まる。警備員とのもみ合いのあと、門前全国集会をおこなう。原告全員の発言のあらの発言が続き、さらに社長面

会要求を闘う。

原告数名が門の隙間から構内には入る。チヨン・〇さん

がその中で気持ちが悪くなり、救急車で病院に運ばれる。程なく戻つて来てふたたび闘いに参加。最後に「第二次大戦下勤労の碑」に献花。

**十月七日**

早朝から、原告と支援者が不

二越正門前で座り込みを続ける。不二越は、バリケードを強化。歩道上での座り込みになる。午後一時三十分に、富山県経営者協会を訪問して申し入れる。

**十月八日**

早朝から台風で風雨が激しく、座り込みを中止。

午後一時三十分から、県庁を訪問して知事とも面会を要求。夕方飛行機で東京へ。

**十月九日**

原告五人が東京行動。富山県選出の参議院議員と会う。強制連行問題院内学習会。

（国会議員が真剣に聞いてくれて、原告たちの「恨」が少し晴

れたようです）

不二越が休みなので原告たち休み

憩

**十月十二日 富山駅街宣（正午から一時間位・原告五人、支援者十人、横断幕、幟旗、チャンゴなど。（原告たち、さすがに疲れたようだが、みんな元気そう。）**

**十月十三日**

午前七時三十分から不二越正門前座り込み再開。門に横断幕、のぼり旗を縛り、いすを並べて。原告が社長面会を求め、工場にはいることを要求。警備員に阻まれるも、一時間ほどのたたかいの後、原告は工場の中に入る。

**十月十四日**

午後一時から座り込みを再開。

**十月十五日**

午前七時から原告五人、支援者十人ほどで門前行動を開始。十月六日から十日間、不二越正門は閉鎖され、横断幕、のぼり旗で埋められる。不二越も、警

察も、原告がいるから門前行動に手を出すことが出来なかつた。

**十月十六日 原告帰国**

仁川空港に、太平洋戦争被害者補償推進協議会が出迎えた。



10月7日不二越正門前で（富山）

## 柳下さんの発言

十月五日結審後の記者会見にて



国に帰つてきたときのこと話をします。私たちが国に戻ったときは終戦間近で、沙里院に工場を建てるから、先生から働いてほしいといわれました。幼いときで、先生のいうことを信じたが、みんな嘘でした。船は牛馬を乗せるような大きな船でした。

当時は戦時中で、機雷がたくさんあり、まつすぐ向かえず、私たちの船の横には、小さな船が二隻あり、機雷を処理しながら進み、目的地まで一週間かかりました。清津（チヨンジン）まで、ろくなものを食べられず、船酔いで苦しかった。清津について、学校に泊まりました。一晩寝て、翌朝、まだ工場ができるないので、一ヶ月間の休暇を与えるから、家で待機するようにいわれました。だまされ続けて、給料をもらえないまま家に帰りました。

工場ではお腹がすいて、腰ひもをきつく締めて、空腹に耐えて仕事をしました。私は背が高く、身体が大きかったので空腹はつらかった。足には霜焼けができ、病院の帰りに道ばたの草を摘んで、茹でてもらつて食べました。

た。とてもお腹がすいていて、その上仕事の対価も支払われずに済ませていいのでしょうか。私は我慢して耐えましたが、あまりにつらくて、工場から逃亡した人もいました。不一越は対価を支払うべきです。嘘をついて幼い十二～十五歳の子どもをこき使つたことが許されるでしょうか。こんな高齢になつてまで、争うことになりましたが、皆さんの力を貸してください。



10月6日不二越正門前



警備員に説教する柳さん

## ★首都闊便り★

今年の七月から九月まで、一時的に築地にある本社ビルに通勤していた。築地といえば魚市場が有名だが、会社のすぐそばには「築地警察署」も建つていて。そう、あの小林多喜一が拷問死した場所。ある日会社の帰りに、築地警察署まで回り、ひょっとして多喜一の慰靈碑でも建立されていやしないかと探したのだが、当然といえば当然ながらそんなものはやつぱりなかつた。

先日は、銀座に映画を行つた帰り、丸の内まで歩いてみた。休日のお散歩にはうつづけのコースである。丸の内界隈はまさにミツビシタウンで、三菱東京UFJ銀行、三菱電機三菱商事などの本社ビルが威容を誇つて聳え建つてゐる。「」を歩いてわたしがどうしても思ひ出るのは、一九七四年の三菱重工ビル爆破事件。しかし重工本社は品川に移転したらしく、あの当時を想起させるものは残つていない。若い世代は事件そのものを知らないだろう。丸の内と銀座に隣接するのが有楽町だが、実はこのあたりがわたしはけつこう好き。上京して最初に会員になった映画館があるのも有楽町だ。見上げると高架を新幹線が走つていく。ここを通りかかり、品川方面へと走る新幹線を見たび、「つらい」とことがあつてもあれに乗れば福岡へ帰れるんだな」と思う。そうするとしないときでも勇気付けられる。おしゃれじやなくてちょっととオヤジっぽい有楽町は、わたしにとってのなまみタウンなのだ。（元編集長・Y）

## 「戦時下支那渡航婦女の記」⑤

(関釜裁判ニュース52、53、54、55号より続く。全文はHPに掲載しています)

平尾弘子

### （八）日本軍の日本人「慰安婦」

中国東北部の荒野に女たちを乗せた列車が、定期的にやってきたという。何もない場所であつたため、列車の車両がそのまま、慰安所として使用されたという。男たちは、そこに列をなした。

「当時は、今とは時代が違う。今の感覚で当時のことは説明できない。娘の身元りなどさらについた。」

と、何度も前置きしながら、福岡市内に住む高齢の男性は、兵隊として中国東北部に進駐していた当時の話を断片だけ語ってくれた。

男性は、私が以前、日本軍「慰安婦」問題について旧日本軍兵士からの聞き取りを雑誌に発表していたことを知り、不意にその話を始めた。抑えた口調ではあったが、かわりようがない。一  
「当時のことは、その時代を生きた人間ですかいう強い戒めを言外に含ませていた。そして、また他の多くの人々同様、今さう、六十  
年以上前の日本軍「慰安婦」問題を検索して、

どうなるものでもないという非難の意味も暗にあつただろう。

しかし、女性たちを乗せ、荒涼とした大地を前線の野営地までひた走る列車の記憶は、鮮銳な影を残して、過去から現在までの空間を突つ切っていく。

一九三九年から一九四二年まで関東軍参謀部第三課兵站班に勤務し、関東軍特種演習（

九四一年七月）の際、軍「慰安婦」配備の事務処理を行なつた村上貞夫氏が、作家の千田夏光氏に宛てた書簡の中に次のような記述がある。

「その業者は日本軍師団連隊の出身の兵、下士官除隊者で、その顔と軍下附の御用商人の木札を所持して軍用輸送船、軍用列車、軍用車両そして軍用の食糧を受けて軍の移動先を転々と女を連れて前線まで行く事が出来た訳です。」（元関東軍下士官・村上貞夫氏書簡『三〇〇〇年女性国際戦犯法廷の記録』第三

卷）

さらにこの書簡の前半部では、日本人慰安婦についても述懐している。

「当初日本人慰安婦を集める予定でしたが、何分当时支那事変の最中で多くの日本人慰安婦は支那大陸に渡り、その不足分を朝鮮人慰安婦を集めた訳で、原參謀は七、〇〇〇人と申して居ますが、小生の記憶では三、〇

〇〇人位だつたと思います。

当時配置表が兵站班事務室の小生のロッカーハンマーで保管して居りましたが、終戦と共に処分した事と思います。

小生は終戦後復員業務の為、厚生省復員事務官として引揚船にてコロ島まで十数回往復し、復員者、引揚者の指導調査にあたりました。

満州各地で邦人難民が集結移動中ソ連兵の女の供出強要、女探しに困惑した時その任を買って出たのが日本人の慰安婦だったそうです。その犠牲の為多くの一般邦人の婦女が助かり、引揚團長は金品を贈りその労を感謝しました」と語っていました。

関東軍特種演習が行なわれた一九四一年七月の段階で既に、もう多くの日本人女性が渡支し、日本軍「慰安婦」に従事させられており、内地からの大量動員が事実上、不可能であったことを示唆している。

日本軍の敗戦後も女性たちの受難が、終わることはなかつた。日本軍「慰安婦」に狩り出された女性たちが、敗戦とともにどのように軍に処遇されたのか、その一端を物語る記述が、「蓬萊山吹会」という台湾軍山砲兵第十八連隊の戦友会発行の戦記に遺されている。（『台灣山砲戰記—南十字の星のもと』蓬萊山

吹会発行

山砲兵第四十八連隊は、十五年戦争時、中支、南支、海南島、フィリピン、インドネシアと転戦し、終戦をインドネシアの小スンダ諸島駐屯中に迎えるが、補充隊の一部は、一九四三年一月一八日独立混成第一十三旅団（純兵団）の砲兵隊に編成され、敗戦を南支、廣東の近くで迎える。純兵団に組織された台灣軍山砲兵の元兵士が戦記の中で、「娘子軍の処遇」として日本軍「慰安婦」の終戦時の処遇について述懐している。

「中国人の娘子達は中国軍に判らない様に車二台に寝かせ、荷物と共に外側に日本兵が人垣を造つて立ち、目立たない所で儲備券（中國紙幣）を渡して、三々伍々解散させた。日本人、朝鮮人は、日本在留邦人引揚者收容所に移送した。勿論儲備券も十分渡してやつた。」（『台灣山砲戦記』、純兵団戦記「娘子軍の処遇」蓬萊山吹会発行）

戦争の間は、弾の飛び交う激戦地にまで女性たちを連れ回しておきながら、敗戦と共に多少の金品を与えただけで、日本軍は女性たちを事実上、その地に遺棄してしまった。

戦争がもたらした人間の狂態も女性たちの身に降りかかる惨禍も、その後もやむことはなかった。

村上貞夫氏の書簡の中でも、他の引揚記録

にも記述されているが、日本在留邦人引揚者収容所において旧ソ連兵の暴行から「一般婦女子を守る防波堤」に慰安婦の経験を持つ女性たちが、供せられた。最後の最後まで、同じ人間、女性でありながら、彼女たちは性暴力の前面に押しやられ、盾とされた。

そのやりかたは、日本内地においても同様だった。筑豊の炭鉱では、日本の敗戦で、一夜にして戦勝国となつた強制連行の中国人労務被害者の暴動を抑え、宣撫目的のため、田川の栄町に在つた二軒の遊郭「見櫻」「豊泉閣」の女性をあてがつたという事実がある。「ここでも『醜業婦』と蔑まれた女たちが、『一般婦女子を守る盾』とされた。

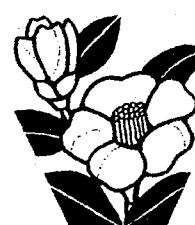
戦時中の古い新聞を見てきた過程で、戦争に関連した記事よりもその端々に載っていた娛樂欄、三面記事、廣告等のたぐいが、何故か鮮明に記憶に残つていて。改めて戦争とは、普通の人々の日常の何気ない日々の積重ねの中で、密やかに緩やかに肥大していく地下茎のもののように感じた。

この文章は、『季刊 戦争責任研究』（第6号2008年秋季号）にも掲載された。連載の冒頭で紹介したように長い月日、図書館に足を運び、古い新聞のマイクロフィルムに眼を通して調査を続けた福岡新聞調査チームの方々（花房恵美子さん、安倍妙子さん、池田道子さん、川野紀子さん、N・Kさん、

小林知子さん、野田鶴子さん、松尾昌世さん）の地道な作業なくしては、論考は成立し得なかつた。調査に携わつた個々の方々の胸中には、私とはまた別なそれぞれの感憤、思索もあつただろうが、調査資料を私に託して頂いたことに深い感謝を捧げたい。

みである。

（完）



## 「戦争展」と「ハートフルフェスタ」を

終えて心に残つたもの

安倍妙子

私事ですがこの数年、体調の不調もあって市民運動をしばらく離れていました。この春以降の運動再開は、色々な意味で私の内面に市民運動の継続の重要さと、その運動の度ごとに起きた新鮮な感想が沸いてくる生のエネルギーのよくなきものを体感する再出発となりました。

まず、米国下院の一三一号決議の波紋が全国の地方議会「慰安婦」決議にも弾みをつけていった事。そしてそのエネルギーは福岡でも発熱、4番目に花開きました。歓喜する仲間たちの興奮の言葉を、私は回復していく自分の身体とともに聴きました。

ハルモニたちの残された時間がどんどん削られていく中で、この「慰安婦」決議の各地での採択はどんなに私たちの運動の勇気付けになつたことでしょう。今こそ真の解決実感とともに参加した二つの展示会での感想と報告です。

夏、その「戦争展」の中で、WAM（女たちの戦争と平和資料館）の『中学生のための「慰安婦」展』パネル展示会は開催されまし

た。

立法ネットの仲間たちとともに展示会の設営と開催期間中の応援に参加して、見学に来た人たちと少しばかりの意見交換をする機会を持つことが出来、そしてその時に来場者から出した意見のいくつかを再び立法ネットの仲間と囁き合って考える時間をもてたことは有意義なことでした。

この、中学生のための「慰安婦」展は、各展示会で在特会の妨害が活発に行われていたこともあり、私たちも多少の警戒心を抱いて展示会に臨みました。展示された資料の内容はとても詳しく解説されていて大きなパネルに仕上がり、順を追つて見ていくだけでかなりの時間要するほどの見応えのあるパネル展になりました。「戦争展」に行くチャンスのなかつた人は、是非WAM編集発行の『中学生のための「慰安婦展』』（千八百円）購入してご覧下さい。パネル展の大部分の出展はここからです。

秋、定例参加となつたハートフルフェスタ行事へのブースパネル展に今年も参加しました。

ここで使用したパネルは「在日朝鮮人『慰安婦』」宗神道（ソン・シンド）のたたかい。二年前に見た映画の内容も素晴らしいですが、このパネルも最高の出来でした。宗神道さんの言葉が生き生きと表されているのです。

意見が感想として述べられ、また、他の報告には「こんな事実はなかつた！」と声を荒げて意見述べる戦争体験者の言葉もありました。後日の反省会ではこれらの意見について私たちも感想を出し合い、それぞれの意見を真摯に受け止めて今後の運動に生かすことを確認しました。

（四頁に続く）

意見が感想として述べられ、また、他の報告には「こんな事実はなかつた！」と声を荒げて意見述べる戦争体験者の言葉もありました。後日の反省会ではこれらの意見について私たちも感想を出し合い、それぞれの意見を真摯に受け止めて今後の運動に生かすことを確認しました。

## 韓国訪問報告

花房恵美子

今回の韓国訪問（七月三日～八日）は前半は福岡で料理勉強会を一年半くらいとともにしてきた若い人たち四人（プラス四歳の子供一人）と釜山での食べ歩きを中心とした旅で、後半は花房二人で原告のハルモニたちや支援者を訪問する旅でした。（途中緒方君たちと合流しました）

五日には若い人たちと別れて柳丁さんと宜寧（ウイリヨン）（陝川と馬山の中間くらい。釜山からバスで一時間半くらい）に住む朴（パク・ヒツ）（不二越）さんに会いに行きました。不眠症がひどくて家族に迷惑をかけるからと、犬猫病院の二階の事務室の隣に暮らしておられます。一人なので話す相手もいなくてテンションが低くなっているし、耳も遠くなっています。一人なので話す相手もいなくてテンションが低くなっているし、耳も遠くなっています。去年の三分の一も日本語ができませんでした。丁さんがいたから会話が成立したようなものです。三時間ほどいて、彼女の生い立ちや、最初に結婚した相手のことを写真を見ながらゆっくりと聽きました。だんだん顔色もよくなり、話も活発になり、最後は「富山に行くぞ！」と以下の歌を歌つて盛り上がりま

ました。  
「日本は一億特攻隊 この魂は父も子  
も歴史貢く魂だ」  
老化と入眠剤の副作用で足元がふらついて階段の上り下りが大変なので、日本行きは難しいだろなど哀しく思いました。

H

六日は釜山からKTX（新幹線）に乗つてソウルへ行き、仁寺洞（インサドン）でカン・ジェスクさんや緒方君たちと合流し、金丁（キム・丁）さんと羅H（チ・H）さんに会いに行きました。

五月の原告団総会に羅Hさんはお墓参りで参加していなかつたそうですが、参加した金丁さんの十月の結審での不二越闘争にかかる決意は固く、文字通り「決死」の気持ちが伝わり怖いくらいでした。「決心しました。私たちには時間がない。不二越の前で座り込みをして、帰らない覚悟です。」

羅Hさんは言いたいことは金丁さんが全緒方君も合流し、吉元玉さんが「水曜デモはしたくてしているんじやない。日本がちゃんとしてくれたらいいでもやめる。韓国の大だけなく、男も皆日本にいけばすぐに解決するはずだ。」（李順徳さんの通訳）としつかり話してください、きちんと聞き取れないのが申し訳ないと思いました。

緒方君は十時過ぎには次の予定のために出られたのですが、そのあと三人になつて李順徳さんは二時間くらい日本語で私たちに話してくださいました。

夕食を一緒にとつて、別れる時、腰を曲げ体を揺らしながらゆつくり歩いていくお二人の後姿を見ながら、どんなに歩くのがつらいでしょに、毅然としておられて頭が下がりました。

夜はカン・ジェスクさんと久しぶりにゆつくり話して、在韓被爆一世問題についての彼女の活動を聞きました。  
七日は午前九時にウリチブに着き、李順徳（イ・スンドク）さんや吉元玉（キル・ウォノク）さんとの再会を喜びあいました。  
  
した。  
夜はカン・ジェスクさんと久しぶりにゆつくり話して、在韓被爆一世問題についての彼女の活動を聞きました。  
七日は午前九時にウリチブに着き、李順徳（イ・スンドク）さんや吉元玉（キル・ウォノク）さんとの再会を喜びあいました。

前日、日本語が出なくなつた勤労挺身隊のハルモニに会つてきたばかりなので、十歳以上

年上の李順徳ハルモニが（九十二歳です）日本語がここまでできることに驚愕しました。

その内容は後に書きますが、一番心に残つてるのは、「人は死んだら目から光ができるそうだ。オレが死んだら光になつてあんたたちの所に行つて知らせるから、悲しんでくれよ」と言われたことです。そのときは絶句していましたが、お昼ご飯を前のお店で駆走になつて、お別れしたあと、彼女の言葉が蘇つて、泣きながら坂道を下つていきました。

三時間以上彼女と一緒にいたのですが、遺言を預かってきたような厳肅な気持ちになりました。

る人を見るたびに「太つている」「瘦せている」「女のくせに足を広げている」（言葉は聞

き取れませんが身振りと表情でわかりました）と現在を実況中継しておられました。多分私たちの顔は覚えていても名前は忘れておられたことでしょう。もう彼女には過去も未来もなく、現在しかないのかもしれません、それはそれで幸福なのかもしれないと思つたものです。彼女から「不二越」という言葉を聞かなかつたのは初めてでした。

そのあと、挺身隊研究所を訪問し李聖順（イ・ソンスン）所長と話し、同じ建物の民族問題研究所や補償推進委員会の李・ヒジャさんのところにもお邪魔しました。韓国NGOの力の強さを感じたものです。

午後からは朴う〇（パク・シ〇）さん（不二越）に会いに行きました。彼女は認知症がひどくなつて今では、デイケアサービスセンターに朝から午後八時まで行つておられるそ�で、其処に会いに行きました。大きなセンターで大勢の職員や患者や家族の方がひつきりなしに通られましたが、一階の認知症患者専用の手仕事作業室のようなどころに朴う〇さんはおられました。

私たちが入つていくと、童女のような笑顔で迎えてくれましたが、会話はできなく、最初に「乾杯！」と言つてコーヒーを飲んだくらいで、後はほとんど独り言に近く、近くを通

問題解決運動や日本社会を相対的に見る視点は新鮮で学ばされました。

八日は水曜デモの日でもあり、忙しい中を挺対協のウン・ミヒヤン代表に九時半から時間を持つて頂き、梁路子さんに通訳をしてもらつて、先述の北九州の日韓共同ワークショップでした花房俊雄の問題提起（いわゆる日本軍「慰安婦」の総数は約五万人前後で、二十万人という数字には合理的な裏づけがない等）を話させてもらいました。

梁路子さんを通じて時間をとつてもらつたときに私たちは挺身隊研究所は挺対協の研究部門であると思い込んでいました。しかし、前日李聖順所長との話で別組織であることを知り、研究所の出した本（「よくわかる韓国『慰安婦』問題」（二〇〇一年発行）をもとに批判と懸念を展開していることに申し訳なさも感じていたのですが、博物館が造られる前に福岡での議論をお伝えできて良かったと思つています。

ユン・ミヒヤン代表には真剣に聞いていただけてありがとうございます。

釜山から帰国するので、十二時のKTXに乗らねばならず、ナスマの家のハルモニたちにもお会いできず、十一時過ぎには挺対協の事務所をおいとしました。

李順徳（イ・スンドク）ハルモニのお話



亡くなつた一人は酔つた兵隊が「俺以外の客は取るなど言つたのに、他の男をあげた！」と言つて刀を抜いて切つて殺した。血がたくさん流れた。その兵士は憲兵に捕まつて、埋をうけた。その二人は着物に包まれて、埋められた。あとの二人は病気になり、「飯を食べられなくなつて死んだ。オレは病気にならなかつたから今まで生きてこれた。

初めて兵隊が入つてきたとき、兵隊は服を脱いで、服を脱ぐように言つた。怖くて必死で身を固めていたら刀を抜いて服の前を切られた。そのとき（レイプされた時）、血がたくさんでた。子供だったので小さかつたので切れて痛かつた。痛いことを考えてくれたらい

いのに、めちゃくちやで…。  
下駄をはき、着物を着た。帯も締めた。歌も歌つた。腹が減つた。  
食事を運んでいたら、足を滑らせて食事をひっくり返して、憲兵から両方の頬をボカボカ殴られた。一人娘だから親にも殴られたことがなかつたのに…。  
(自分を)好きになつた兵隊がいて「結婚しよう」と言つたけれど、「本妻がいるだろう。本妻がいるならダメだ」と言つた。  
「飯が少なくて本当に腹がへつた。  
中国人から豚足を三百円(?)で買つた。すごく美味しくて力が涌いた。  
兵隊に少しわければ、美味しいと言つていた。

(戦後)田舎に帰つたら、姉さん(姉はいな)いので近所のかたかも)から「良い人がいるから結婚しなさい」と言われた。  
オレは男が嫌だから絶対結婚はしたくないと断わつたが、姉さんが何度も結婚しなさいといつた。お母さんが「いつまでも若いわけではない。私が死んだら頼る人が誰もいなくななる。結婚しなさい」と言つて、冷たくした。  
結婚することにした。夫には本妻の間にできた三歳の女の子がいて、オレがその娘を育て、学校にもやつた。あんたたちはその娘を知つておられるでしよう。(家に伺つてお会いしたことがあります)

ウリチブに来たことがある人が亡くなつて、その人の葬式に行つたことがある。  
棺に入れられて、電気を入れたら、パッと焼けて、小さな骨になつた。

町は土地がないから、死んだら焼かれる。オレも死んだら焼かれるだろう。

死んだら、知らせに行くから「李順徳さん! 可哀相!」と思つてくれよ。

人には目に光があつて、死ぬときは光が体から離れて、空に上つていく。あんたたちのところに会いに行くから、会つてくれよ。悲しんでくれよ。

今、言つておく。  
オレが死ねば誰がこの話をするのか。

今度いつ来るのか。

来年までおれるかどうかわからん。死んでるかもしね。

「飯を食べていいなさい。オレが払うから払うなよ。(福岡に来られる毎に、「全部お世話をなつておられるけれど、カネがでたらみんなにお札するよ。韓国に來たらご馳走するから」と言つていました。韓国に行く度にご馳走になつています)

(別れるとき)行くなら早く行きなさい。悲しいから。

(一〇〇九年七月七日ウリチブにて)

# 活動日誌 2009年4月～11月

2009年

- 4月27日 関釜裁判ニュース55号 印刷発送作業  
5月18日 早よつくろう！「慰安婦」問題解決法・ネットふくおか（略称：立法ネット）会議  
5月23日 不二越原告団会議（於：ソウル）  
6月4日 藤田一枝さんを励ます会  
6月13日 オール連帯第2回協議会－福岡の活動報告（於：東京）  
6月15日 不二越控訴審第5回口頭弁論－五十嵐さん証人尋問（於：金沢）  
6月22日 立法ネット会議  
6月24～26日 日韓過去事100年の歴史清算の為の日韓共同行動ワークショップ（於：北九州）  
6月27日 イトー・ターリさんパフォーマンス in 西南大  
7月3～8日 韓国訪問  
7月20日 立法ネット会議  
7月25～26日 強制動員真相究明全国研究集会（於：神戸）  
8月12日 日本軍「慰安婦」問題解決のための世界同時水曜デモ（福岡・天神）  
8月17日 真相究明福岡県ネット会議  
8月18～23日 戦争展－「中学生のための『慰安婦』展」参加  
9月14日 立法ネット会議  
10月5日 不二越控訴審結審－柳丁さん意見陳述（於：金沢）  
10月6～15日 不二越正門前座り込み闘争（於：富山）  
10月16日 不二越訴訟原告団帰國  
10月18日 日本軍「慰安婦」問題解決のための全国関係者会議の予備会議（於：大阪）  
10月19日 立法ネット会議  
10月25日 ハートフルフェスター宋神道さんのパネル展示  
11月8日 日本軍「慰安婦」問題解決のための全国関係者会議（於：東京）  
11月16日 立法ネット会議  
11月17日 「ナヌムの家」上映会に向けて、田村ゼミ生に事前勉強会

## ★関釜裁判ニュース56号★

2009年11月22日発行

編集作業人 花房恵美子 緒方貴穂

発行

戦後責任を問う 関釜裁判を支援する会  
代表 松岡澄子 入江靖弘

E-mail hanafusa@df6.so-net.ne.jp

年会費 3,000円

郵便振替01740-047678

口座名 関釜裁判を支援する会

WEB版関釜裁判を支援する会

ホームページアドレス

<http://www.kanpusaiban.net/>

不二越訴訟のお問い合わせは  
第二次不二越訴訟支援 北陸連絡会

ホームページ

<http://www.fitweb.or.jp/~halmoni>

来る12月4日に、インドネシアの日本軍「慰安婦」被害者の方をはじめて福岡にお招きします。被害者を福岡にお呼びする最後の機会となるかもしれません。5日にはドキュメンタリー映画「ナヌムの家」と「ナヌムの家II」の上映とナヌムの家にハルモニたちとともに住み、歴史研究員として働いている青年・村山一兵君のお話を聴きます。

ようやく政権交代が実現し、日本軍「慰安婦」問題の立法解決の可能性が現実性をもってきました。

被害者の声、被害者の思いという原点にたちかえり、「解決したい」という世論を高めていくことが今こそ必要だと思っています。

12月の連続企画へのご参加と署名活動へのご協力をお願ひいたします。

## 編集後記

1年間が私たちにとってこんなにも短いのに、ハルモニたちにとってこんなにも長いのかと考えさせられました。いろんな意味で「時期」がきているようです。（東）